

発刊にあたって

淑徳大学学長 長谷川 匡俊

平成16年度版の発刊以来、大学年報の発行が軌道に乗ってきました。自己点検・評価項目を三次に分け、昨年度版を以てひとまず全項目を一巡したことになります。したがって、今回は点検・評価の体裁をとらず、第一部に年間の諸行事・諸活動と教育事業・研究活動・社会貢献活動等の成果を取りまとめて記述し、第二部に大学基礎データ等を掲載しています。

本学の1年間の事業や活動を自己点検・評価し、かつ不断の改善と充実を期していくための基礎資料となるものです。また大学の各種情報をステークホルダーに広く開示し、率直な意見や要望等に耳を傾けて、信頼が得られるよう努めていかねばなりません。

さて、私は平成19年の年頭に当たり、理事長・学長として改革のキーワードに「連携・開発・貢献」の三つを掲げ、教育・研究・社会貢献の飛躍的な展開を期したのです。同年4月からの看護学部並びに姉妹法人淑徳福社会「淑徳共生苑」（特別養護老人ホーム）の開設等を視野に入れてのことでした。看護学部の順調な船出をはじめ、実り大きい年でしたが、反面、大学を取り巻く環境の厳しさは、20年度学生募集の実績のうえに顕著に表れています。

またこの年から、学長としてより意識的に大学の地域貢献を学内外に訴え、組織的な取り組みに入りました。学祖の淑徳大学構想に関する一文には次のようにあります。「大学としてはいわゆる、一、教育 二、研究 三、地域開発、の三つの機能を不断に最大級に実現実施すべきであるが、特に本学所在の大巖寺が浄土宗の檀林として四百年來、学僧育成の道場であり、また開創者・道誉上人以來、二代虎角、三代靈巖など時代指導の英俊相次いで輩出した名刹であり、また特に地域開発文化昂揚の先驅をなした実績の深遠なのにかんがみ（下略）」と。大学の三大機能の一つに、あえて「地域開発」をあげ、大巖寺檀林の歴史と伝統に基づくものだと言及していることに、私たちはもっと関心を持たねばなりません。

キャンパスがどこにあらうとも、学祖の大学についてのイメージには、必ずその周辺地域への貢献が含まれていると見るべきなのです。若き日の学祖が大学セツルメント運動のリーダーとして活躍されたことはよく知られています。グローバルな視野や視点を大切にしつつ、ローカルな足下の問題を決して見逃さない態度、そこに私たちが学祖から学ぶべきところがあるのではないのでしょうか。

おわりに、本年報の執筆・編集を担当された役職者並びに大学自己点検・評価委員会の各位に謝意を表して、ご挨拶といたします。

2009（平成21）年2月